

●イエス様はこの世に来られ、イザヤが預言したように「見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く。そのとき歩けなかった人が鹿のように躍り上がる・・・喜びと楽しみが彼らを迎え、嘆きと悲しみは逃げ去る」という神の国の到来をもたらされました。しかし、その光景は誰の目にも麗しく見えるというわけではなかった事を今日の聖書から知らされます。

●悪霊を追い出していたイエス様に対してある人々が「あの男は悪霊の頭ベルゼブルの力で悪霊を追い出している」と言いました。「ベルゼブル」とは、古代エクロンという土地の神を指しますが、ユダヤ教のラビたちはそれをヘブライ語で「バールゼブブ（ハエの王、汚物の王）」と呼び、悪霊の頭と読んで忌み嫌っていました。まるで汚物にハエが群がるようなそんな光景がイエス様の周りであったのです。このイエス様に対する非難の言葉はイエス様が絶望の極みにあった罪人、病人、生まれつきの障害を持ったような人々に、どこまでも寄り添い、その病や汚れを分かち担おうとしたイエスの姿を的確にとらえた表現だったのです。

●レンブラントの版画「病人たちを癒すキリスト」は光と影を巧みに用いて神の国の到来が暗闇の中にある民達にこそ示されたことを描いています。イエス様は私達の汚れを負い、周りから悪霊の頭呼ばわりされようが、苦しむ人々にどこまでも寄り添われました。その主は今もハエのように手を合わせ祈るより他ない私たちの救い主として私たちと出会ってくださるのです。

私たちは受難節の歩みを続けています。人々の汚れを負い、労苦された神の子イエス様を思う時です。甚大な被害の出た被災地、過酷な介護の現場、精神的な病や心の問題、この世に様々な過酷な現実と向き合う私たちの現実にこそ神の国が臨むのだという事を覚え、希望を持って生きていきたいと思えます。

